

ロボット支援の人工股関節置換術 200関節達成



手術支援ロボット「Mako」とスタッフ

令和4年2月に導入した人工股関節の手術支援ロボット「Mako」を使用した手術が、去る12月に200関節に到達しました。これも信頼して受診して下さった患者さん、ご支援いただいたクリニックの先生や病院スタッフの皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

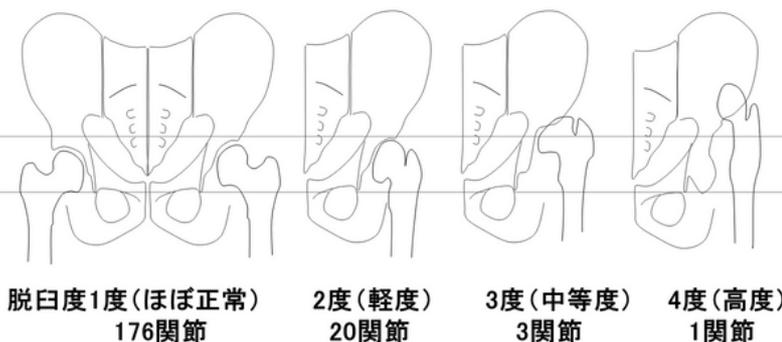
手術症例について

手術した200関節は、主に変形性股関節症という軟骨が減って痛みが進行する病気が中心でその他、大腿骨頭壊死症や関節リウマチなどでした。

44歳～87歳（平均65歳）の患者さんに施行し、変形の程度は末期が90%、進行期が10%でした。やや専門的なことで手術の難しさに関する股関節の脱臼度は、多くが1度（ほぼ正常）ですが、2度（軽度）や3度（中等度）も含まれ、4度（高度で完全脱臼）の症例にも使用しました（図1）。

図1

股関節の脱臼度



ロボットを使用した印象について

人工股関節はカップをストライクゾーン内に入れることが重要で、ここでロボットが活躍します。

医師が手術前に患者さんの股関節にあわせてカップの位置・角度を決めますが手術では、ほぼ理想通りに入ります（図2）。

瞬時に下肢の長さも知ることができるため、その後に行う経験と勘によるバランス調整、下肢の長さの調節も非常にスムーズです。

股関節が悪いと腰や膝の変形を伴っていることも多く、単に教科書通りに人工関節を入れるだけでは、それぞれの患者さんにあった下肢になるとは限りません。ロボットを使用してからより患者さんにあった人工関節の設置ができるようになったと思います。

術後の患者さんについて

患者さんには、退院1～2ヶ月後に再診して状態を確認させて頂いています。ロボット導入してからきれいな歩行になっている患者さんが増えたと感じます。この点について、今後リハビリ大学の先生と調査する予定です。また、余談ですが人工関節時の新たなバランス調整方法を行っています。ロボット手術でも取り入れており、昨年に引き続きヨーロッパ整形外科学会で発表する予定です。

これからも患者さんのお話しの耳を傾け、スタッフとともに地道に診療を続けたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

股関節・人工股関節センター 青田 恵郎 センター長

図2

